

筑波技術大学卒業生アスリート「スポーツとキャリア発達」

葭原滋男氏

皆さん、こんにちは。今見て頂きました PARA☆DO!というフジテレビの番組で、取材して頂いた番組なんですけど、自分の今まで生きてきた根底にある何かがある、この中かなり盛り込まれてるなと思って、自分でもすごく気に入っている番組であります。ということで見て頂きました。

この後、自分が、先程中島先生が同じ年ということをして言いました、長い人生、生きてきたんですけど、その中で、やはり自分の中でスポーツというのは自分の奥底に秘められた、すごく何かを育ててくれたものかなと。その辺をね、自分の経緯というか、その辺からどんなふうにならっていくか、そんなところをお話させて頂きたいなと思ってます。

まず、自分は視覚障害者です。網膜色素変性症という病気で、網膜の病気です。10歳の時に病気があるのが分かったんですけども、その頃はまだ生活には全く支障がなくやってきました。そこから徐々に徐々に進行して行って、今は天井の照明とか光は見えるんですけども、皆さんの姿は見えない。そのくらいの視力になってます。全体的には、真っ白な紙に光がポツポツと見える、そんな具合になってます。22歳の時に障害者手帳を取得しました。それまでは普通に学校生活を送ってきました。

今もサーフィンやっている映像とか、ブライドサッカーとかの映像とかありましたけれどもね、パラリンピックでも、やはり陸上競技の走り高跳び、あるいは自転車競技、そんな競技で出場しました。自分としては視覚障害者っぽいスポーツって何か気に入らないんですよ。目が悪いと危ないからそんなスポーツはやっちゃいけないよ、そんなスポーツ、自分としてはやってみたいな。どうやったら出来るのかな。そんなことを考えて今に至っているのかなと思います。

まず自分の性格っていうのは、とにかく好奇心旺盛です。なんか面白そうだな、やってみようかな、そんなふうになると、取り敢えず何でもやってみてしまう。負けず嫌いなところもすごく大きいです。最初はやっぱりうまくいかないこと、いっぱいあります。そういう時に、どうやったら出来るんだろうかな、そんなところをいろいろ考えたり、工夫すること、そん

なことが非常に大好きです。

学生時代はどっちかっていうと、理系な方ですね、物理とか数学、そういうのが大好きな子どもでした。分析したり、予測したり、そういうのが非常に好きで、得意な方だったみたいです。そういうのが今の生活にも役立っているのかなとは思っています。

そして、まずパラスポーツに関わるようになったのは22歳の時です。障害者手帳を取ってから、所沢にある国立障害者リハビリテーションセンター、あそこに通いまして、マッサージの勉強をしていました。それまでは普通にスポーツを楽しむ、その程度の生活をしていたんですけど、その国リハに通い始めた時にパラスポーツに出会いました。国リハに通い始めた頃、自分としては視覚障害者、障害者に対する何かイメージとして、可哀想、誰かに助けてもらわないと生活が大変そう、そんなイメージを持っていました。実際に自分がその障害者になって、マッサージの勉強をしている。俺は可哀想なのか。でも可哀想な人間にはなりたくない。今まで22年間、楽しい生活をして来ました。見えなくても、何かいろいろ工夫することによって出来るんじゃないか、そんなことを考えていました。また、自分の思っている可哀想な障害者像、こんなのをぶち壊してですね、みんなが憧れるような障害者像、新しい障害者像、そんなのを作ってみたいかと、自分からそこにたどり着いていく。そんなふうに思ってマッサージの勉強をしていました。

その時、学校の若い仲間を集めて、RBBというグループを作りました。Revolutional of blind brothers、視覚障害者の革命家達。そんな感じでグループを作ってですね、視覚障害者っぽくないことをいっぱいやる。まあ、飲んでばっかりいたんですけど。その他にもですね、スキーに行ったり、視覚障害者だけでキャンプ行ったり。そんなことをやりながら、飲みながら、次は何をやるのか、いろんな企画を立てていました。

そんな時、健常者でいう国体ですね、全国障害者スポーツ大会、こんな大会があるということを知りました。あ、障害者で国体あるんだ。たまたま、その知った時が沖縄で大会がある。沖縄行きたいな。どうやったら行けるのかな。申し込んじゃえ。そんな感じでね、パラスポーツと出会いました。

学校の体育の先生にいろいろ見てもらって、うん、走り高跳び、なんかすごいね、やってみようかな。そんな感じで、走り高跳びをやるようになったのかな。そんなこともあって、パ

ラスポーツと関わりましてですね、4回までパラリンピックも出場しました。

3年間マッサージの勉強をしながら資格を取りました。さて、じゃあ次、就職。そうなった時に、やはり自分の中で、決められた道に進むのはちょっと面白くない。何か新しい道は無いだろうか。自分なりにいろいろ調べてみました。そうすると、公務員が毎年障害者を採用している。それを知ることが出来ました。これ、チャレンジするしか無いんじゃないか。そんなことを考えましてですね、チャレンジして、東京都庁に就職しました。

都庁に入って、いろんな仕事をさせて頂きながら、パラリンピック目指していきまして、やっぱり仕事をしながらパラリンピックを目指す。結構ね、厳しかったです。普通に9時から5時まで仕事をして、まあ残業もありました。その後にスポーツセンターとかに通って、自分なりにトレーニング。結構厳しくて、やっぱり自分でもめげてしまいそうなことも有ったんですけど、そういう時自分がやったのは、スポーツセンターまで定期券買いました。定期券買えば、そのお金もったいないからスポーツセンター通うだろう。そんなふうに分身にプレッシャーをかけました。あるいは4年間の計画を立てました。4年後のパラリンピックを目指して、自分はどこに到達していくか。その4年後の目標設定に向けて、じゃあ自分は今何をやらなきゃいけないのか。課題をいろいろリストアップしていきまして。そうすると大体ね、50個くらい見つけることが出来ました。もう小さなことから、大きな課題から、いろんなのを含めて50個くらい見つけました。その課題を一つずつ全部クリアすれば、自分は4年後に目標に到達出来るはずだと。そんなふうを考えまして、ではその課題を一つずつクリアしていこう。そんなふうになったら、50個といたら、1週間に1個、課題をクリアしなきゃいけない。そういうことで、本当に課題一つをクリアするのも、夢中に真剣に取り組まないと、課題をクリア出来ない。そんなふうに住生活をしていったらば、4年間あっという間に経ってしまいました。

そして、パラリンピックに出場したんですけども、最初は1992年のバルセロナパラリンピックでした。走り高跳びで出場したんですけど、その当時はやはり職場でも、「君はね、もう社会人なんだからね、もっとちゃんと仕事しなさい。スポーツで遊んでいる場合じゃないよ。」職場の上司に言われまして。まあ、アジア大会とかそういう時は、開会式にも出れない。閉会式にも出れない。「競技が終わったらすぐ帰って来なさい。」そんなふうに住言われた時もあります。

そんな生活をしていたんですけれども、96年のアトランタパラリンピックではメダルを獲得しました。銅メダルなんですけどね。それで自分としては、年齢的に30半ばです。自分的にも結構満足出来ました。やっとパラリンピックでメダル獲れた。そんな気持ちもありました。でも、そうなると今度周りの目が変わってきました。「すごいね、パラリンピックでメダル。もっと頑張ろうよ。仕事いいから。」そんな感じで、今までよりもすこし楽な仕事をさせてもらいながら、スポーツに取り組む時間も頂くようになってきました。

そして2002年ですね、先程、事故という話もありましたが、私はその時にブラインドサッカーに出会いました。皆さんブラインドサッカーってご存知ですか？知っている人ちょっと拍手してください。殆ど知ってる。やったことある方はいらっしゃいますか？あ、3~4人居そうですね。ありがとうございます。このブラインドサッカー、選手は視覚障害者、アイマスクをして、完全に見えない状態でプレーをします。なので、結構難しいんですけれども、選手が頑張るといことも大事なんですけれども、それ以上に、周りの見えてる人が選手のためにどうしてあげたらいいか、何て声をかけてあげたらうまく出来るのか、ゴールに結びつくのか、そんなことを考えて協力するのがすごく大事なスポーツです。こんなスポーツに出会ってしまって、なんかこれって、社会を変える力がありそうだな、そんなふうに思えてきました。

今日一緒にガイドで、サポートで来て頂いているマユちゃんですね。えー、今ね、ドキッとしました？ブラインドサッカーでうちのチームの仲間としてね、ゴールを呼び込む女神として活躍して頂いています。そんな方達とプレーをしている。まず感じたのは、このブラインドサッカー、やっぱりアイマスクをしてプレーをするというので、非常に難しいです。見える方も、アイマスクをすれば国内の試合であれば、皆さんも選手として出場することも許されている。そうするとサッカーやったことがある、フットサルやったことがある、そういう方達が、なんか面白そうだ、なんか不思議なスポーツだなとチャレンジしてきます。そうするとやっぱり、いきなりアイマスクをすると、なかなかうまく行きません。そうすると、自分達は日常生活からもうアイマスクをしたような状態ですので、アイマスクしてもあんまりかわらない。そうすると、自分達の方が結構うまく出来るんですよ。そうすると、このブラインドサッカーの世界では、一般の社会はなんとなく健常者が上、視覚障害者が下、そんなイメージあるかなと思うんですけど、このブラインドサッカーの世界に入ると、それが逆転します。視覚障害者の方が上、健常者が下、そんな感じを自分の中で感じる事が出来ました。これってなんか社会に与える印象って強いんじゃないか。社会を変える力を持って

そう。そんなことを感じる事が出来ました。

それで毎週水曜の夜なんですけどね、東京港区の乃木坂の方で練習をするようになってきました。いろんな視覚障害者、仕事終わってね、ちょっとストレスたまってるところで、夜みんなで集まってボール蹴ってストレス発散しようよって、そんな感じで始めたんですけども、やはりそこには健常者のサッカー好きな人達。そんな人達もちよっとやってみたいなと仕事帰りに寄ってくれるようになりました。そういう中で、その視覚障害者と健常者の上下関係、そういうのを壊していく、壊すことによって、みんなが、全員が何かを感じてもらえるんじゃないか、そんなふうに思いまして、毎週継続的に続けてきました。もう 15 年ですかね、毎週水曜日に続けてきました。

そして 2011 年が乃木坂ナイツと言って、乃木坂で夜練習していたので、そういうこともあってですね、乃木坂ナイツ。夜の夜間練習から昼間のチームに、そういう感じで、暗闇から革命を起こそうぜ。そんな感じで乃木坂ナイツの騎士達が昼間の街に舞い降りた。そんな感じでチームを起ち上げました。そんなことで、このスポーツを通しながら、社会を何か革命が起こせそうだ、そんなことにも取り組んでいます。

また、やはり自分としては都庁で勤めていながら、周りにはあまり視覚障害者の仲間がいません。スポーツの世界にはいるんですけど、他の視覚障害者殆どいませんでした。自分の住んでいる街にもどこに視覚障害者がいるのか全然分かりませんでした。まあすれ違っても見えないので全然気が付かない。そういうところで、自分の住んでいる街に、どんな視覚障害者が居て、どんな生活を送っているのかな。そんなことを段々知りたくなってきたのが 50 歳くらいでしょうか。地域の視覚障害者の団体に加入しました。そうすると、やはりたくさんの視覚障害者がそこには居ました。でも、その視覚障害者達、目の見えない人のために何か地域でどうにかしてくれ、そんな訴える人達だった。点字をつけろ、道路には誘導ブロックをちゃんと全部ひけ、そんな感じでアピールをしていました。なんかね、自分としてはこのアピール合ってるのかな？それで本当に自分達の生活楽になるのかな？そんなふうに思いまして、なんかみんな違うんじゃないの？もっと大事なことがあるんじゃないの？そんなことを感じて、地域の視覚障害者の団体は辞めて、いろいろとね、行動、活動、意見交換をして、そんなことを繰り返していました。

そんなのを 50 歳過ぎから始めまして、そんな時に 2020 年の、まあ今年ですね。東京のオ

オリンピック、パラリンピックの招致が決まりまして、自分の子供達も社会人になった。そんなきっかけもありまして、自分として何が出来るのか、いろいろ考えて、28年間勤めてきた都庁を辞めて、フリーで動くことにしました。結構ね、公務員を辞めるって障害があって、公務員を辞めるっていうのはすごく怖いというかね、勇気のある決断だったなと今でも思っています。9割以上の方が反対しました。でも自分としては何か自分にしか出来ないことがあるんじゃないか。このままではなんか自分の人生物足りない。そんなことを思って決断に至りました。そして、スポーツを通して社会を変えたいなって、そんなことを考えて、学校や企業やいろんなところで講演をやったり、体験会をやったり、そんなことをしています。体験会とかですね、ノンブラインドサッカー協会、そういう団体の方で障害の有り無し関係なく、当たり前に関わり合う社会を作りたい。そんなレガシーを持って、活動している協会の方でもお手伝いをしながら活動しています。

そんなことをやっているうちに、今年の夏くらいなんですけれども、今所属している参天製薬、毎日サッカー協会のパートナーとしてですね、ブラインドサッカー協会を支援している会社なんです。そこから、うちでちょっと働いてみないかってお声かけを頂きまして。参天製薬、眼科に特化したスペシャルカンパニーですね。目薬や眼科の医薬関係を中心にやっている企業で、そういうところからお声かけを頂いたんですけれども、自分として目薬の会社に入って何出来るのかなあと。実際自分は眼科にも既に通っていないし、目薬なんかもさしていない。そういう自分とは関係がかけ離れちゃった会社じゃないかって、そんなことも考えたんですけれども、その会社に入って何が出来るのか、いろいろ考えてみて、そこで自分の中で得た結論としては、見えないっていうのも1つの症状で、眼科に通わない患者さんもたくさん居るよねと。そういった人達に対して、企業として何かやるべきではないか、やらないといけないでしょ。そんなことを感じまして、そして社内でそういうことをアピールする、社員向けにセミナーを開いて、そういうことを社員に考えてもらう、そんなきっかけを頂きました。参天製薬、世界70か国に支店があります。この後2年程で全て回れと社長命令が下ってます。時間がね、本当に全て回れるのか？と思いながら、今活動しています。

そして、こんな活動をさせて頂きながら、参天製薬、ブラインドサッカー協会のパートナー企業でもあります。その中で、もうチラシってお配り頂いてますかね？お手元にありますか？今月の3月、品川の天王洲の方でブラインドサッカーのワールドフラッグが開催されます。参天製薬はタイトルスポンサーということで、大会名に名前が入ってしまいました。ここまで自分がいろいろ入ってきたことによって、どんどんどんどん企業も変わっている。

そのへんも大きく。まあ是非ですね、入場無料ではなく、有料になりますけれども、もしよかったら皆さん観戦して頂けたらと思っています。

自分が今現在に至るまでをちょっとお話しました。この中で自分が感じることは、スポーツというのは障害のあることを忘れることが出来ます。見えないことを忘れることが出来ます。一人のアスリートとして、結果を追い求めていく。その中では見える見えない関係なく、一人のアスリートになる。それが自分にとってスポーツの魅力であるなと思っています、それによっていろんな広い視野で社会を見ることも出来なと思っています。また、スポーツの世界では、見えないってことを忘れることが出来るんですけども、それってやっぱり一般の社会の中でも同じような環境を作ることが出来るんじゃないかな？そんなふうにも考えています。

また、障害があるということで、いろいろネガティブになりがちなことはい多いです。でもその中で自分はどうやったら出来るんだろう、そんなことを、いろいろ工夫することを楽しみます。それによってどんどんどんどん、こういう私みたいなのがいったり、そういうふうに頑張っている仲間が居ることによって、それを見た人達もどんどん社会が変わっていくんじゃないか、それによって社会もどんどん変わっていくんじゃないかな、そんなふうにも考えています。

自分は視覚に障害があります。視覚障害者というのはこういうことなんだよ。あるいは、障害が見えないということで結構不便なこともありますけれども、周りの見えてる人がどうやったらいいのかな？何て声かければいいのか。そんなことを考えて、いろいろ協力することによってね、どんどん社会が変わっていくんじゃないか、自分はそんなふうにも考えています。

自分、現在 57 歳になりました。アスリートとしては、既にゴールがもう間近なのかな。あるいはもうゴール通り過ぎちゃってるかもしれない、そんなふうにも思うんですけど、自分の中ではまだまだゴールは遠く先にある。そんなね、ゴールを目指して、まだまだ頑張っていきたいと思っています。ありがとうございました。